



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 14～大蔵川ほか～

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪ほー、ほー、ほーたる来い こっちの水は甘いぞ  
あっちの水は苦いぞ ほー、ほー、ほーたる来い

(唱歌『ほたるこい』：作詞・作曲：わらべ歌)

## 1. ほたる前線北上中

桜前線が先日、稚内まで行き着的というニュースを聞いたかと思うと、次に南から北上を始めたのがほたる前線。鹿児島県川内川流域では5月中旬から川岸に木々にとまる数千匹のホタルを鑑賞するための「ほたる舟」が出るほどの見頃を迎えたという。「ホタルが出始めた」と聞くとうずうずしてくる自身にはしっかりとほたる鑑賞が四季の風物詩として身体に刻み込まれているということだろう。

5月23日、高校時代の同級生の結婚式に出席するため地元へ帰省した。こんな時期に帰省することはめったになく、高校以来の北九州の初夏だった。ほたる前線は北九州に到達寸前であり、北九州市周辺の河川ではほたる目撃情報がちらほら出てきていた。

少し余裕を持って帰省したので、久々に地元のほたるめぐりをし、自身の少年時代の記憶をたどってみることにした。

## 2. 大蔵川のほたと土佐野先生 (5月25日)

北九州市八幡東区大蔵を流れる板櫃川。大蔵周辺の人は愛着を込めて大蔵川(図1)と呼ぶ。この大蔵地区は洞海湾から急にきつくなる傾斜上にあり、古くからの閑静な住宅街である。工業地帯周辺に平野がなく、海からすぐ山になり、山の斜面に住宅を展開させた事例としては六甲山地をイメージすると分かりやすいかもしれない。)上流域には河内貯水池など水源域がある。何度か大蔵川には行ったことあるのだが、この時期に行ったことがない。大蔵川のホタルの話は人づてによく飛ぶと聞いていた。

昔から北九州市自然史博物館自然史友の会の自然観察会などでお世話になっていた土佐野先生が大蔵にお住まいなので電話をかけてみることに。

坂本：「先生、ご無沙汰しています。実は今地元へ帰ってきているのですが、ホタルが見たいなあと思ひまして。」

土佐野：「今年は早いようでもう結構飛んでいるよ。今夜も結構飛びそうだからおいで。」夕方18:30頃に伺うことにした。この時期の18:30はまだ明るい。土佐野先生のご自宅に伺い、明るいうちに大蔵川周辺を散策。川沿いには家が張り付いているものの、川の中は植生



図1 大蔵川(板櫃川上流部)の川の様子



図2, 3 子供達が作成した大蔵川愛護のポスター

もみずみずしく生えている。側面はコンクリートで高低差もあり少し親水性にける区間もあるが、典型的都市河川の中でうまく自然を創出している。

橋には大蔵小学校の子供達が作成した大蔵川愛護のポスターが貼ってある(図2, 3)。多く小学校は大蔵川のすぐ目の前を流れており、横断歩道渡ったらずぐ川だ。小学校前の勝田橋は木製のあたたかみのあるデザインがされていて、橋の下には水車や親水空間が整備されていて、子供達にとっても自分の庭のような川だ。この地域は小学校、自治会が緊密に連携して活動を行っており、大蔵川の清掃が盛んに行われている。周囲の自治会のメンバーで活動する『大蔵川を守る会』は上流域の高速道路などのトンネル工事などで川の水

量が減少に加え水質汚濁などが目立ち始めた1969年に組織された団体で歴史は深い。自治会の構成員で行ってきた活動のため、代替わりしながら長く続いているのかもしれない。1994年から大蔵川の清掃活動をはじめ、小学校の児童らとともにやってきたという。

土佐野先生は数年前までは市内の小中学校校長で、ご退職後の現在は大蔵川を守る会の会長として児童と環境学習に取り組んでおられる。小学校で長年教育に携わってこられただけあって、子ども達への川の活かし方を常に考えておられる。

「最近ホタルが飛び出したからホタル情報のチラシを作っておね、これを近所の人にばらまいてやろうかと思ってて。これでじいちゃん・ばあちゃんの家で孫が遊びに来るキッカケになったらいいでしょ？」きつとこのビラがポストに入った家のおじいちゃん、おばあちゃんは孫に「ホタル飛んでるよ！見においで。」と連絡を入れるだろう。

昨年度はホタル観察会も開催し、300名近くの方が観察に来たそうだ。最近ではホタルを見るイベントをほたる祭りとするところも多いが、あくまで観察会にしたいそうだ。常に学びの姿勢を考えるのは土佐野先生流だろう。

## 2.2. 日没2時間後の大蔵川

20:00頃になると辺りはすっかり暗くなった(図4)。ホタルは日没2時間後が最もよく飛ぶため、20:00～21:00までの間が最も観察に適した時間である。土佐野先生と一緒に川沿いの遊歩道を歩く。遊歩道の明かりのほとんどは黄色灯になっている。ホタルは白色灯の明かりを昼と勘違いして飛ばなくなることがあるという。方や黄色灯はホタルが波長を感じないため飛翔に影響はないのだという。この地域ももともと白色灯の電灯だったが、ホタルへの影響を考え、自治会で寄付を募り約200万近く集め、黄色灯に変えたという。(土佐野先生曰く、この地域は地域の交流が盛んなためこういう協力を求めると応援してくれる人がたくさんいるそうだ。)白色灯がホタルの飛翔に影響を与えると知っている河川管理者、道路管理者などは一体どれくらいいるだろうか？河川管理者は河川構造物だけでなく、周囲の環境も総合的に管理してこのような影響を極力少なくしてほしいし、道路管理者も道路のことだけでなく、すぐ横の河川のことも考えてほしい。

堤防上の遊歩道のフェンスから川の中を覗き込む。川の中は闇に包まれていて、注水植物が闇を深くしている。草の葉の間をちょろちょろ流れる川の音だけが聴こえる。じーっと目を凝らしてみると草の中からふわっと淡い黄色の光が舞いあがった。

「あっ！いた！」思わず声を出して一番星を指差した。堤防付近まで舞い上がったホタルは堤防の上の桜の木にピタッと止まって光りはじめた。川底の草の葉の間から次々光り始める。思わず「あっちに



図4 日没後の大蔵川

も！あ、こっちも！」と声を出してしまうのは溢れ出す歓喜ゆえだろう。いつの間にかあちこちで絶え間なくホタルが光っていた。

土佐野先生がおっしゃるに、堤防の側面の植生や堤防上の植生があるとそこも止まり木として利用することで掘り込み河道のような河川で底が深くても近くでホタルを見ることができるそうだ。逆に低水路以外に植生がないとホタルはそこでしか止まることはできない。このような習性も親水空間の演出のためには河川管理者は把握できるとよりよい親水空間の創出につながるだろう。

下流に向かって再び歩き始める。少しひやっとした夜風が顔を拭い、時々光るホタルの光が身体に涼をもたらす。途中ですれ違った散歩の人とても気持ちよさそうなのは「こんばんは！」という挨拶の声を聞くと分かる。

歩いていると対岸から「あ、また光ったよ！」「あらほんとね！」と声が聞こえてくる。対岸には4～5人の黒いシルエットだけ見える。おそらく近所の家の方が家族で見に来たのだろう。ホタルの光だけでなく、あちこちから湧き上がる歓声もホタルを楽しむ大事な要素の一つだろう。

約1時間の散歩を終え、大蔵川のほたる観察を終了。川と家の距離が近いだけに身近に感じたホタル観察であった。

## 3. 尺岳川のホタルと思い出(5月24日)

八幡東区でホタルを見て帰路につき、近くまで迎えに来てもらった。ちょっと家路を遠回りしてもらい、直方市を流れる遠賀川水系尺岳川沿いを通って帰ることに。ここは高校時代の通学路でちょうどこの時期は文化祭間近で夜20:00頃川沿いを自転車で通って帰っていた。車の窓を開けると初夏独特の草露の匂いと少しどぶ臭い川の匂いが鼻を突き、当時のことが脳裏に蘇ってきた。

### (回想-高校時代-)

まだ真新しい制帽をかぶった高校生1年生が家路を急ぐ。国道を右折し、だんだんと細い道に入り車の台

数も減りあたりは暗くなった。細い道の横には川が並走して流れている。田んぼから蛙の鳴き声が聞こえどこか少し物悲しい。結構この時間に帰るのは怖いのだ。明かりもなければ人気もない。周囲が静かなだけに川の中で時々魚がピチャンと匆ねる音でびくっとする。なんだか空気も少し生暖かい気がする。闇の中での風や音は少年の恐怖心を助長させるには十分であった。突然のウシガエルの「うもお～」と鳴く声はもうこの上ない恐怖だった。

ふと川底に目をやると小さな目玉がいくつか光った。嗚呼、もうだめだ。とうとう出たんだ……。今度は目玉が川底から飛び上がった。幽霊は空も飛べるらしい。スピードあげて走り去りたいが、文化祭の準備のために持ち歩いていた荷物が重くて自転車のスピードはこれ以上出ない。もう闇に万事休す。

恐怖は判断力も落すらしく、光がホタルだと分かったのは川沿いを一時走ってからだった。家族ではよくホタルを見に行っていたが一人でホタルを見たのはこの時が初めてだった。こんなコンクリート張りの小さな川で少しどぶ臭い川にもホタルは飛ぶことを知った。

それからというものの文化祭準備の帰りの川沿いは毎日が楽しみになった。恐怖とは心の持ちよう、闇夜もウシガエルの鳴き声もホタルを見る演出の一部に感じる。自転車でできるだけゆっくり川沿いを通り時には橋の上に自転車を止めてホタルを眺めた。

～○～●～○～●～○～●～○～●～○～●～○～

細道に差し掛かり、車を降りて少し細道に入っていく。だんだん川に近づきながら川を覗き込むがホタルの光は見えない。もういなくなっちゃったのかなと一瞬思ったが、橋まで来て深く下を覗き込むと橋の下をホタルが乱舞していた。高校時代と変わらない風景が10年近くたった今でも残っていた。

尺岳川は小さな河川で中流部以降は決してきれいな水質ともいえないし、川も無機質で一見魅力的な川とは思えないが、私にとっては大切な思い出の川だ。

#### 4. 黒川のほたる祭り (5月25日)

ホタルを見てきたと弟に話すと妙に食いついてきた。普段は私が帰省した際も話を鬱陶しがら次男だが、今日はよく話に乗ってくる。「もうホタル飛びよーと？俺も見に行きたい。」小さい頃ホタルはよく家族で見に行っていたのでホタルを見に行く時のワクワク感はまだまだ残っているようだ。

車を走らせ、八幡IC付近の遠賀川水系黒川に。黒川は新堀川・笹尾川と合流し、遠賀川に注ぐ。

この黒川では毎年ほたる祭りが行われるほどホタルが数多く舞う。川底や川の中の植物などを『香月・黒川ほたるの会』が手入れをして生き物の棲みやすい水辺空間を維持している。ホタルは人里の生き物であるから少し手の入った川のほうがよく飛ぶ。

川沿いにはほたる祭りの幟旗や橋の上の赤ちょうちん



図5 香月・黒川ほたるまつり

などがほたる祭りが近いことを知らせていた(図5)。6月1日～2日のほたる祭りにはまだ早い十分な数のホタルが舞っていた。見物に来ている人も結構多くあちこちから声が聞こえる。「ほー！ほー！ほたるこい！」なんとほたる歌まで聞こえる。

闇の中を盛んに舞っていてきれいだが、見物に来る人が多いのでしょっちゅう川沿いに車が通り、ライトが川を明るく照らしてしまうのが少し興奮め。

1週間後にはもっと飛びそうだ。

#### 5. 今年のホタル

今年は例年より1週間程度出現が早い地域もあるようだ。数は多めのようなのだが、少しホタルの体長が2～3mm小さい気がする。まだ出始めだからかもしれない。ホタルを一度は見ないと夏の川は始まらない。最近まだホタルを見たことが無いという人がちらほらいるので、一度はぜひ連れて行ってあの感動を味わってもらいたいと思う。川に季節感を出す自然の芸術に今しばらく酔いしれたい。

##### 【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りにはホタルを見に行くこと。



